HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | アイヌ語の複雑述語の研究［論文内容及び審査の要旨］ |
| Author(s) | 岸本, 宜久 |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(文学) |
| Dissertation Number | 甲第13403号 |
| Issue Date | 2019-03-25 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/74487 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/ |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | Yoshihisa_Kishimoto_review.pdf, 審査の要旨 |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　岸　本　宜　久

主査　教　授　佐　藤　知　己
審査委員　副査　教　授　加　藤　重　広
副査　教　授　清　水　　誠

学位論文題名
アイヌ語の複雑述語の研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

アイヌ語の複雑述語に関する興味深い先行研究としては、既に Bugaeva and Nakagawa (2013)があるが、これは主として文法化現象を念頭においた類型論的観点からの研究と位置付けられ、この現象の本格的な解明には、実証的データに基づく、さらなるアイヌ語の複雑述語に関する詳細な記述研究が不可欠であった。本論文は、このような近年のアイヌ語研究における一つの潮流の要請に、まさしく応えるものであると言える。特に、これまでのアイヌ語の研究の、いわば伝統と言える、実証的、記述的研究にしっかりとした基盤を置きつつ、そこにとどまらずに、一般理論を積極的に参照して、これまでの記述研究ではあまり問題にされてこなかった、複雑述語をなしている構成要素間に存在する、構造上の制約の諸問題について、偶然とは言い難い、特異な傾向（自動詞、他動詞の選好関係）があることを見いだしており、この問題に関する新たな理論的研究の可能性を切り開いたものとして、高く評価することができる。構造は違うが、共に動詞が連続する構造である補助動詞構文と助動詞構文において、第二要素となる動詞（V2）の性質が異なり、補助動詞構文では自動詞が選好され、助動詞構文では他動詞が選好される、というのは、アイヌ語研究においてこれまで明確に指摘されることがなかった、重要な観点であると思われる。また、記述的な観点から見ても、従来は単に同一の構文のグループに属するとみられていたような構造（助動詞構文、kar okere「作り終える」のようなもの）の中に、実は別種の型（主語イベント構造、arki tunas「来るのが早い」のようなもの）が存在する可能性を指摘したことは、極めて刺激的であり、この点は今後の研究に大きく寄与するものとして特筆すべきであると考える。この場合、第二要素となる動詞（V2）の性質に着目し、たとえば、一見、tunas「早い」とそれほど性質が異なるようにはみえない pirka「よい」が助動詞構文には現れない理由として、アイヌ語のこの種の主語イベント構造においては、イベント項の内部の主語と、V2 の主語が同一でなければならないという制約があるが、pirka はイベント節それ自体を主語として取ることしかできず、イベント節内部の主語と一致することができない、という性質を持つことを指摘し、動詞間での項の共有関係が複雑述語の成立に少なからぬ影響を及ぼすことを実証的に論じている。他方、今後に課題を残している点もないわけではない。制約に関わる実証的、記述的研究は十分なされていると言えるが、研究史的観点から言えばこれまでの研究の蓄積が少ないテーマである以上、ある程度はやむを得ない面もあるとは言え、理論面において、なお、さらなる検討が必要と思われる部分も残っていると言わざるを得ない。特に、項共有という概念のみを中心として、複雑述語の第二要素における、動詞の選好現象を必要十分なまでに説明できるかどうかについては、やはり、なお、検討が必要であろう。たとえば、補助動詞構文が共通に示しているアスペクト的意味との関連性、助動詞構文における主語イベント項に関わる強い制約と、補文構造一般との関連性など、さらに議論が必要と思われる点が残っている。しかしどちらかと言えばこれまで記述研究が中心であったアイヌ語の研究において、ここまで実証と理論の両方にまたがる議論を進めて、重要問題のありかと解決の道筋を明らかにしたことは大きな研究上の前進であり、その言語研究への学術的貢献は十分に評価に値すると考える。

なお本論文に先立って、査読付き論文 2 編と全国学会を含む 5 件の口頭発表という実績があり、

手堅く論考を重ねて独自の研究成果を挙げていると評価することができる。

- 学位授与に関する委員会の所見

大量のアイヌ語資料を基に実証的に手堅く考察を進めている点、生成文法による分析事例を参考としてアイヌ語の助動詞構文を分析し、これまで気づかれていない制約を明らかにする一方、助動詞構文とは必ずしも同一の扱いができない補助動詞構文については、さらに RRG による分析を導入して興味深い制約を明らかにしている点、以上により、アイヌ語の複雑述語を総体的に扱うことを可能にしている点、多くの事例について丹念にアイヌ語の LSC（節の階層構造）を提示している点、これらすべてがあいまって、本論文は、実証に加え、近年の理論的研究にも目を向け、これまでにない観点からアイヌ語の文法現象を見直し、新たな問題点を発見、考察を加えたものとして高く評価できる。以上の審査の結果、審査委員会は全員一致して、本論文の著者である岸本宜久氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。